

旭川赤十字病院医学雑誌 30号発刊にあたって

旭川赤十字病院医学雑誌がついに30号の発刊を迎えた。第1号の発刊は1987年であった。ほぼ年1号のペースで発刊してきた。この間に掲載した論文は593編にのぼる。旭川赤十字病院医学雑誌に掲載された論文は医学中央雑誌にも掲載される。旭川赤十字病院医学雑誌は旭川赤十字病院にとって大きな勲章の一つと言える。

この30年間の旭川赤十字病院医学雑誌の変遷の中で気が付くことがある。一つは論文数の推移である。当初毎号30編前後の論文が掲載されていた。しかもその大部分が医師からの論文であった。1998年頃から看護師の論文が増加するとともに、徐々に医師の論文が減少した。さらに、2012年～2016年には看護師からの論文も減少し論文数が一桁になってしまった。医師の論文数の減少は旭川赤十字病院医学雑誌に限らず日本の医学界全体の問題となっている。特に顕著となったのが初期臨床研修制度が始まった2004年頃からである。我が旭川赤十字病院医学雑誌においても2004年を境にして医師からの投稿論文が一桁になったが、その数年前から徐々に減少してきていた。初期臨床研修制度により医局制度が崩れたこと、医師が論文を書いて博士号を取るという旧来の価値観を捨てて、臨床に時間を割いて専門医を取ることを優先するよ

うになったことなどが背景にある。

この反省から専門医制度の中では論文作成の実績が求められるようになってきている。医学はその多くの部分が経験から成り立っている学問である。過去の多くの症例の積み重ねが新しい発見・治験を生み、次の診療に貢献している。この積み重ねをなくしてしまえば医学の発展はない。AIでさえも多くの論文を読み解読することで診断・治療の答えを得ることが出来る。論文を書くことは医師として、医療従事者として重要なことである。

昨年度から論文を旭川赤十字病院医学雑誌に投稿した場合のインセンティブを設けた。「投稿筆頭者には、道内・道外問わず学会・研究会または研修会への参加を出張として1回認める(参加費用も含める)」というものである。その成果があったのか減少傾向にあった論文数がこの30周年記念号では13編と2桁に回復した。このインセンティブが論文執筆の起爆剤になってくれることを期待したい。今後、若い医師を始めとして病院職員が自分の得た経験を論文にまとめ、将来の医学に貢献してくれることを切に望んでいる。

院長 牧野 憲一